



東京YMCA

2017 6 月号

発行所 公益財団法人東京YMCA 発行人 菅谷 淳
135-0016 東京都江東区東陽2-2-20 電話 03-3615-5562

URL <http://tokyo.ymca.or.jp>

東京YMCAの使命

東京YMCAは、イエス・キリストによって示された愛と奉仕の精神にもとづいて、青少年の精神、知性、身体の全人的成長を願い、地域社会に奉仕し、公正で平和な世界をつくるための運動を展開する。

ボランティア・オブ・ザ・イヤー Volunteer of the Year

熊本地震復興支援 マラソンチャリティーコンサート実行委員会



今年の「ボランティア・オブ・ザ・イヤー」は、熊本地震後全19回にわたってチャリティーコンサートを開催した「熊本地震復興支援マラソンチャリティーコンサート実行委員会」が受賞しました。

震災後、被災地のために何かしたいと8人の実行委員が集まり、さまざまなジャンルの音楽家たちに声をかけたところ協力者の輪が広がり、また都内の教会も会場を提供してくださって、7月から5ヶ月間で19回のコンサートを開催。来場者は延べ800人以上、益金総額は185万9,611円になりました。

写真は当日参加した実行委員。左から安倍愛樹さん(日本基督教団久我山教会牧師)、飯靖子さん(委員長・音楽家・本会理事)、曾我部清典さん(音楽家)

2017年度会員部運営委員

◆再任(15名)

相川 達男	上田 晶平	柿沼 敬喜
金丸 満雄	工藤 大丈	菰渕 光彦
高橋 伸	直井 道子	中村 周三
中村 孝誠	長谷川あや子	林 正人
宮谷 直幸	村杉 克己	山口 直樹

◆新任(5名)

小原 武夫	小原史奈子	篠田 秀樹
東矢 高明	綿引 康司	

◆退任(5名)

笈川 光郎	*任期満了 大橋めぐみ	小松 重雄
長谷川正雄	長津 徹	



世代や立場を越えて集まった会員たち



キャンプソングを歌うボランティアリーダーたち

15回目となる今年度は5月27日(土)、東京YMCA東陽町センターを会場に開催されました。テーマは「会員の会員による」

うことがありました。会員部運営委員会のもとにある会員維持・増強委員会(委員長・笈川光郎氏)では、もっと会員が主体的に大会を担い、自分たちの東京YMCAを

34名、今年143名と徐々に増えていきます。来年はさらに多くの会員の皆様にご参加いただける素晴らしい大会となる予感がする(会員部 沖 利柯)

第15回

会員大会開催

会員が企画・運営 多彩な活動を紹介

東京YMCAを支える会員が年に一度集まり、事業活動の報告と委員の推挙、各種の表彰や交流を行なう「会員大会」。

27日(土)、東京YMCA東陽町センターを会場に開催されました。テーマは「会員の会員による」

の願いには、会員大会の魅力ある内容にして、一人でも多くの会員の方にご参加いただきたいとい

ではそれぞれ工夫を凝らした発表が行われ、東陽町センター1階は賑やかに人で溢れかえりました。(▼2面)

なお、今年度の名誉会員には元理事長の茅野徹郎さんが推挙され(2面「ぶどうの枝」)、また左記の20名の会員が会員部運営委員として推挙されました。

ユース ボランティア・オブ・ザ・イヤー Youth Volunteer of the Year



林 秀人さん(東陽町センター) *写真左端
社会体育・保育専門学校の実習としてキャンプに参加して以来、障がい児のキャンプなど、多くの活動に積極的に参加。東陽町センターキャンプの看板的存在。

大木 梨名さん(江東センター) *左から2番目
小学生の野外活動はじめ、キャンプやバザーなど江東センターのプログラム全般で先頭にたって活動。いつも元気いっぱい子どもと遊んでくれる良きリーダー。

中村 有里さん(西東京センター) *写真中央
大学1年生から4年間、幼児から高校生、知的障がい児・者の活動など幅広く参加。リーダートレーニングでも活躍し他のリーダーにも慕われる。

久保田 美穂さん(山手センター) *右から2番目
大学1年生から幼児の野外グループ活動、小中学生のキャンプや障がい児プログラムなどに幅広く参加。パワフルさと柔軟さを兼ね備え、子どもにもリーダー仲間にも人気がある。

梅原 大樹さん(南センター) *写真右端
NYフロストバレーでのジュニアリーダー経験を経て、2015年から南センターでリーダーに。幼児、小学生の野外グループ活動や障がい者プログラムなど幅広く活躍。



総主事カフエ

菅谷 淳

総主事カフエによつて。5月27日の会員大会は天候にも恵まれ、運営委員の皆さんの工夫を凝らした企画のおかげで、プースによる活動報告やジャズピアノ演奏、サイレントオークションなど活況のうちに大成功となりました。終了後、会員部の新旧運営委員の歓送迎会を兼ねた打ち上げがありました。40人は集まったでしょうか、そこで一人ひとり、終わったばかりの会員大会について感想や意見を自由に述べました。今回は会員による手作りで全員参加型の大会であったことが高く評価されました。

打ち上げで私の前に座っていた方が驚いていました。その方は今回初めてYMCAの会員大会に参加したそうですが、若い人から高齢な方まで、学生もいれば職員もボランティアもいる、会社の社長から大学の先生、実業家や音楽家などがみんな和気あいあいと楽しく会話をしている、こんな団体見たことありません。確かにYMCAではそれが当たり前ですが、外から見るとこの団体は一体何だろうと思われませんか。学校といえは先生や生徒の集まり、会社は社員の集まり、サークルは同じ趣味を持つ人の集まりです。ではYMCAはどのような人の集まりなのでしょう。

答えはきっと「誰かのために何か良いことをしたい人の集まり」です。集まった人の笑顔を見ると本当にそう思います。良いことをするのに年齢や職業、所属、肩書、立場は関係ありません。YMCAの正章に刻まれている「すべての人を一つにしてください(『ヨハネによる福音書第17章21節』)」の本質が見えたような気がした会員大会でした。

赤三角

会員大会で名誉会員の推挙を受けた茅野徹郎氏が答礼で「東京キリスト教青年会」への所信を述べられた。最近聞かないが以前はこれが正式名称だった。Young Men's Christian Associationの和訳である。「青年のキリスト教的な団体」の意味だが「キリスト教青年の団体」Young Christian Men's Associationとはなっていない。ここが奥深い▼実のところ、YMCAは「キリスト教的」であるからこそ宗教の隔てを越えていくのだ。キリストは隣人愛を最重要の掟とされ、宗教的弱者の隣人となられた。この宗教を越えた愛の実践に徹する志を大同一する限り、宗旨の違いは小異である▼娯楽では方便も必要だろう。キリスト教が目立っては具合が悪いだろうか。しかし内部ではこのキリスト教主義をタブーとも他人事ともせず、談論風発して全会員が自家薬籠中の物としなくてはならない。「東京YMCAの使命」と「パリ基準」に学ぶことは、数多の偉大な先達のお働きへの表敬でもある▼YMCAのど真ん中にあるもの、それは正章の中心にあるこの熱い祈りでなくてはならないであろうか。「父よ、すべての人を一つにしてください。」(評議員 林 正人)

We build strong kids, strong families, strong communities. YMCAは、たくましい子どもたち、家族の強い絆、支えあう地域社会を築きます。

会員が紹介する Y M C Aの会員活動

今年の会員大会は、会員がブースを出して日ごろの活動を紹介しました。



↑ にほんご学院

約150人の留学生が日本語を学ぶ「にほんご学院」。学校の特徴や日本での生活について、留学生が紹介しました。



↑ 国際協力・国際交流

バングラデシュ Y M C A の教育支援や青少年の国際交流活動などを委員が紹介。来場者と共にその意義を考えました。



↑ 障がい児・者プログラム

障がいのある方の余暇活動とその意義などを、実体験を交えて紹介するユースボランティアリーダー



↑ 学生寮「山手学舎」

格安の学生寮としてNHKでも紹介された「山手学舎」。寮生活のほか被災地でのボランティア活動などを舎生が紹介。



↑ 江戸城ファミリーウォーク

江戸城に関する講演を聞き、歴史に思いを馳せながら江戸城内外を歩くイベント。その魅力と30年余の活動歴を紹介。



↑ 神田川船の会

神田川等を船でめぐる「歴史クルーズ」。「蘇れ神田川！」をテーマに1979年から年2回開催。特製せんべいも販売。



↑ 音訳ボランティア

目の不自由な方のために文字などを音声化するサークル「シジウカラ」は、実際の録音テープを使って活動を紹介。



↑ 「ベテランティア」

「人生のベテラン」であるシニアを対象に20年余り開催しているボランティア活動スタート講座。



↑ 山中家族キャンプ

山中湖センターで86年にわたって開催している家族キャンプについて、実行委員の方々が紹介。



↑ liby・高等学院

オープンスペースliby（リビー）と通信制高校サポート校「高等学院」は、子どもたちの日常などを紹介した。



↑ 被災地応援販売コーナー

被災地を支援するため、会場で東北や新潟などの地産品を販売する会員の皆さん。



第3部の会場の様子。軽食とジャズピアノ演奏、サイレントオークションなどを楽しみながら和やかに交流しました。



Y M C A の人

東京 Y M C A 名誉会員
アメリカ ホンダ元社長
茅野 徹郎さん (85歳)



Y M C A と出会ったのは、敗戦まもない高校生の時。軍国主義から民主主義へと急激に変化する中、新しい価値観を見出したいと地元の山梨県韮崎教会を訪れたのがきっかけだった。そこで Y M C A 主事と出会い、母校の韮崎高校にクラブ活動「ハイ Y」（ハイスクール Y M C A）を設立。友人らと聖書を読み、奉仕活動やワークキャンプなどをした。「共に汗を流して語り合った経験は、その後の生き方に大きな影響を与えてくれた」。高校3年生の時に受洗。その後、国際基督教大学の1期生となって上京した。

社会人になってからは多忙だった上、国内外を15回も転居したため Y M C A から遠のいてしまったが、アメリカに赴任した79年に再会した。当時アメリカでは、ドロップアウトした青少年の更生のためさまざまなプログラムが試みられていたが、中でもサンフランシスコ Y M C A が始めたミニバイクを使ったプログラムは効果が高く、アメリカ Y M C A 同盟はこれを全米で取り組もうと企画 (NPRM = National Youth Program Using Minibike)、ミニバイクを製造していた我が社にコンタクトしてきた。すでに前任者が社会貢献の一環として協力することにしていたが、それを引き継ぎ、全米での展開に向け相当数のミニバイクを寄贈し、安全運転の指導なども行なった。以後、チャリティゴルフなどにも参加し、Y M C A

との付き合いは深くなった。90年に帰国。東京 Y M C A の会員になった。91年から評議員、監事、理事、理事長などを歴任し、神田会館の閉鎖や公益法人改革など、激変していく東京 Y M C A を支えた。2003年前後に学生寮「山手学舎」の廃止をめぐって意見の対立が起きた際には、自ら数十人の寮生や O B に会って話を聞き、山手学舎には意義があると判断。財政をサポートするため後援会を組織し、存続の道を開いた。Y M C A だけでなく国際基督教大学やキープ協会でも役員を務め、企業経営の手腕を活かした。特に、アメリカの寄付文化を目的にしたりした経験から、学校や団体での寄付の大切さを説く。「寄付したことを誇りに思えるような寄付が大切です。日本の寄付文化はまだまだこれからですよ。」(文・広報室)

お知らせ

Y M C A ブランディングプロジェクト進行中

全国の Y M C A は、これからも地域社会においてなくてはならない存在であり続けるために、ブランディング・プロジェクトに取り組み、2016年6月に「Y M C A ブランドコンセプト」を定めました(下図)。Y M C A が願う世の中の姿をビジョンとして示し、社会に提供できる Y M C A の「宝=価値」を磨き、その価値を広く効果的に伝えることによって、より多くの方から共感、支援、賛同を得ることを目指しています。

Y M C A ブランドコンセプト

Vision Y M C A が実現したい世の中の姿

互いを認め合い、高め合う

「ポジティブネット」のある豊かな社会を創る。

* 互いの存在や個性を認め合い、高め合うことのできる、善意や前向きな気持ちによってつながるネットワークのこと。課題の多い社会の中で、それは、生きるためのひとつの選択肢となっていく。私たち日本 Y M C A は、グローバルなネットワーク基盤を活かしてポジティブネットを広げ、希望あるより豊かな社会を作ります。

Value Y M C A がステークホルダーに提供を約束する価値

したい何かがみつき、誰かにつながる。

私がよく、かけがえのない場所。

「みつかる つながる よくなる」

Personality ブランドとして備えているべき個性、らしさ

心をひらき、わかち合う。

前向きで、まわりを惹きつける 魅力をもつ。

ロゴマークが変わります 2017年10月1日公開予定

上記コンセプトに示された Y M C A を表す新たなロゴマークとスローガンが10月1日に公開予定です。ご期待ください。

(日本 Y M C A ブランディングタスクチーム
東京 Y M C A 副総主事 星野太郎)

障がいのある子どもたちがスポーツ体験

日本代表選手たちが指導

高橋尚子さんも来場

肢体不自由児とその家族を対象に5月3日、三菱商事株式会社と東京YMCAが共催で新豊洲のD.C. One (フリリア) ランニング スタジアムを会場に「第2回 ドリームキャンプ」を実施しました。

晴天に恵まれ、21家族60人が参加。障がい者スポーツ日本代表選手等の指導で、車いすバスケット、チェアスキー、レーサー(陸上競技用の車いす)、ボッチャ、車いすラクビーの体験をしました。

今回はシドニーオリンピック女子マラソン金メ

ダリストの高橋尚子さんも応援に来てくださり、子どもたちは、パワフルで愉快なアスリートに囲まれて緊張しつつも、笑顔で各種目に挑戦していました。

球技は、車いすとボールの操作を一緒に難しさをあ

東京YMCAは14年度より三菱商事株式会社と共催で月1回、主に発達障がいのある子どもたちを対象に、親子で球技や水泳を楽しむ「ドリームクラス」を開催しています。今回は、肢体不自由児を対象としたキャンプでしたが、障がいの有無や種類によらずに誰もがさまざまなスポーツを楽しめるよう、活動を推進していきたいと思っています。(山手コミュニティセンター 大津桃子)



球技は車いすとボールを一緒に操作するため難しいが、選手と一緒に挑戦した。



保護者にアドバイスする選手たち。(写真左から)池崎大輔選手、廣道純選手、高橋尚子さん

保護者同士の交流時間もあり、日常の情報交換

障がいのある子どもたちを対象に、親子で球技や水泳を楽しむ「ドリームクラス」を開催しています。今回は、肢体不自由児を対象としたキャンプでしたが、障がいの有無や種類によらずに誰もがさまざまなスポーツを楽しめるよう、活動を推進していきたいと思っています。(山手コミュニティセンター 大津桃子)

チャイルドケア職員全体研修会

深井智朗氏 講演

東洋英和女学院 大学副院長/牧師

5月27日、東京YMCAの児童・保育事業に関する職員130名が一堂に会して春の全体研修会

行われた。ここ数年、春季研修は外部講師から講義をいただき、秋にはその課題を各現場がどう取り組んできたかを事例発表しており、アドバイザーの新澤誠治先生に総括をしていただいている。

今年度は東洋英和女学院大学副院長で牧師の深井智朗先生をお迎えして「正しく愛すること、正しく愛されること、キリスト教保育の作法」と題して、キリスト教保育の原点について学んだ。

多くの学びと指針をいただいた研修だったが、特に印象に残ったのがドイツのメルゲル首相の父親の話である。彼女の父親はドイツがまだ東西に

分かれていたころ、伝道師として東ドイツに派遣されたが宗教活動は禁止されており、教会を建てることできなかったため、代わりに幼稚園を作ったという。「聖書の話をすれば密告されてしまう」という状況の中で、幼稚園に何がなければいけないのかということがわかった。それは愛することだった。何かを語ることもできない中で、子どもたちを良く抱きしめた」という。

私たちの保育に何が最も必要かということを変更して教えていただいた研修だった。(世代間交流事業 統括 波多啓造)



2017年度東京YMCA 児童・保育事業全体研修会(春季) 「正しく愛すること、正しく愛されること〜キリスト教保育の作法」 2017年5月27日(土) 9時〜12時 東京YMCA社会体育・保育専門学校

分かれていたころ、伝道師として東ドイツに派遣されたが宗教活動は禁止されており、教会を建てることできなかったため、代わりに幼稚園を作ったという。「聖書の話

私たちの保育に何が最も必要かということを変更して教えていただいた研修だった。(世代間交流事業 統括 波多啓造)

■各国文化を体験 TYIS カルチャーウィーク

アフリカン・ドラムカフェも来場



東京YMCAインターナショナルスクール(TYIS)は5月22〜24日、各国の文化を学ぶ「カルチャーウィーク」を開催。フィンランド、モルジブ、ナミビアの大使による講演のほか、生徒や保護者らが8つの教室を使い、母国の郷土料理や伝承遊びなどを披露しました。最終日の24日には「アフリカン・ドラムカフェ」が来場。150個のドラムが生徒一人ひとりに用意され、アーティストと一緒に全員でたたきました。このグループは、ドラミングの楽しさや癒しの力、人をつなぐ力などに着目して世界各地で活動しており、東日本大震災以降は仙台でNPO法人を立ちあげ、今も被災地を支援しています。当校教師が声をかけたところ、子どもたちのためにと急ぎよ仙台から駆けつけてくれました。(http://www.drumcafe.jp/)

多くの方の協力で、子どもたちはそれぞれの文化の魅力を楽しく体験することができました。

■深川八ヶ町こども大運動会に400人参加

江東センターと8つの町会が協働開催

江東区の石島、扇橋、千石など、8つの町会とYMCAが協働で開催している「深川八ヶ町(はっかちょう)こども大運動会」。34年目となる今年は5月14日、江東区の千石運動場で開催。前日までの雨で会場の変更が検討されましたが、当日はグラウンドの状態もよく、予定どおりにスタート。山崎孝明江東区長も来場くださる中、子どもたち400人が大玉送り競争、綱引き、パン食い競争、町会対抗リレーなどを元気いっぱいに行いました。



YMCAからは、幼児・小学生50人ほどが参加。多くの保護者、小学校の先生、町会長や町会の役員方々など、地域の皆さんの大声援が一つになって、運動場いっぱい響きわたりました。

この運動会はもともと江東YMCA幼稚園の保護者や町会関係者の発案で始まったもの。YMCAが事務局となり、ボランティアリーダーやワイスメンスクラブの力もかりて30年以上にわたって継続している、貴重なコミュニティ活動です。

今年の主催は「深川八ヶ町連合子ども会」「北部ジュニアリーダーズクラブ」「東京YMCA江東コミュニティセンター」。YMCAは競技進行や準備などの事務局を担当し、スタッフ6人のほか、ボランティアリーダー10人が参加して大活躍しました。(江東コミュニティセンター 草分俊一)

東京-NY フロストバレー便り

フロストバレーでは、6月中旬からディレクターやリーダーのトレーニングが始まり、7月初旬から2ヶ月間、サマーキャンプが実施されます。350名ほどのキャンパー、35人ほどのリーダーたちとの熱い夏が今から楽しみです。

今年日本から7名のリーダーがこのサマーキャンプのために渡米します。そのリーダーたちの飛行機の手配について先日、取引先の旅行代理店から「帰国の飛行機の時間と空港が変更になりました」と連絡がありました。予約時の手違いだったようですが、空港まで間違っていたことには驚きました。代理店担当者に尋ねたところ、アメリカではあまり珍しいことではないそうです。

アメリカは謝らない国だと言われます。逆に日本人は謝りすぎると言われます。アメリカは分業、責任の分散が確立されているため、悪いのはミスをした部署であって、カスタマーサービスセンターが謝る必要はないと考えるようです。日本では、従業員一人ひとりが会社、団体を背負い、責任を共有します。そのため、別の部署の間違いであっても謝る文化があります。アメリカでは、電車の遅延なども度々起こり、理不尽に待たされることもあります。内心は皆かなりイライラしてい

と思いますが、文句は言いません。日本では、電車が遅れる度に声を荒げて文句を言う人々がいます。そのため駅員は、自分に責任はなくても「遅れて申し訳ございません」と謝罪します。

先日、「日本の過剰労働は『お客様』の暴走が原因」と題した社説を読みました。日本のサービスは「おもてなし」という言葉に表されます。「心をこめて客の世話をする」という意味だそう。ただ現在、その意味がサービス提供者側からの一方的な奉仕と理解され、いわゆる「お客様は神様」の状況を生み、客の立場が異常に高く、「客は思うままに振舞ってよい」という勘違いを生んでいます。元来「おもてなし」とは、まず客を思いやる気持ちがあり、客もその厚意を感じて感謝する、「お互いに心地よくなるための心遣い」でした。過剰なサービスを提供するための過剰労働は、「やってもらって当然」だと思ってしまう「お客様」に問題があるようです。

社会はさまざまなサービスで溢れていますから、誰もがサービスの提供者にもなるし、受益者にもなります。「お互いに心地よくなるための心遣い」に努めたいものです。

(在フロストバレー-YMCA 鳩山徹郎)